複雑化する日本の安全保障

Vol.63

苦い結末？

米国の大統領選挙が終わりました。結果はご存じの通りトランプの勝利ですが、今回は選挙人の獲得の点だけでなく得票数の点でも対立候補を上回っています。つまり、文句のつけようのない勝利だったということです。そして世界は来年1月に始まる新しい政権がどのような政策を推進するか固唾を飲んで見守っています。

中東については、トランプはバイデン以上にイスラエルに肩入れをしていることから大勢に影響はありません。ネタニヤフ首相の嬉しそうな顔が何よりも雄弁に物語っています。問題はウクライナです。プーチンとの親密な関係を隠そうともしないトランプがどのような方針を示すのか、ゼレンスキーにとってはつらい時間が過ぎていきます。

現在の戦線で停戦する、という提案がトランプから出された場合には、ウクライナはクリミア半島を含めて国土の馬鹿にならない部分を失う恐れがありますが、同時にプーチンもクルスク州の一角を失うリスクに直面します。北朝鮮からの兵力がロシア軍とともにこの突出部に向かって攻撃を繰り返しているのも、年内に侵攻しているウクライナ軍を撃退したいというプーチンの意向を示しています。第二次世界大戦後領土を失う初めてのロシアの指導者という不名誉は受け入れたくないでしょう。

そして停戦は一時的な措置だということを忘れてはいけません。

ロシアとウクライナとの間に和平の合意を成立させて、新しい国境線を画定させることが必要となります。その国境線を描くためにどのような暗闘が繰り広げられることになるのか、今のところ予測不可能でしょう。トランプがどのような考えを持っているのか分かりませんが、脅したり透かしたりという手練手管がふんだんに必要となることでしょう。

今回の戦争についてはこれまでにも何度もお話ししてきましたが、一つだけ議論してこなかったことは、ウクライナに国民意識が育ったことの意義についてです。

プーチンは9世紀の末から13世紀にかけて存在したキエフ・ルーシと呼ばれる国を重要視しています。キーウを首都とし白ロシアからモスクワ、さらにその北方にまで勢力圏を広げていた大国です。プーチンはこの国家の存在を根拠として、ロシア・白ロシア・ウクライナは兄弟国であり本来一つであるべきだという考えを持っているようです。そして中心はモスクワだということになります。そうした考えからすれば、ウクライナが主権国家として存在すること自体が笑止の沙汰なのでしょう。裏切りといってもいいかもしれません。ロシアを弱体化するための西側の陰謀に加担したウクライナ人がいる、彼らこそがファシストであり駆逐されなくてはならない、という論理があるからこそ、今回の軍事行動は他の主権国家への侵略ではなく特別軍事作戦であり、主権国家内の行動であるために国連憲章に何ら違反するものではないということになります。ロシア正教会のトップに立つキリル総主教が「特別軍事作戦」に祝福を与えたのも当然なのです。

この論理を受け入れる人たちが多少なりともウクライナにいることは、東部の地域でロシア軍の進出を歓迎しロシアのパスポートを受け取った人たちがいることを見れば分かると思います。しかしそれが多数派を形成していないことも確かです。つまりプーチンが軍事力を行使したことで、中部から西部にかけての（そして東部の一部の人たちも含まれますが）ウクライナの人たちはロシアから離れる方向に動いているのです。

プーチンの考えと行動とが、結果としてロシアに反対するウクライナを作り上げたともいえます。そしてこの動きは仮に停戦が実現したとしても止まらず、講和の交渉を難しくするものであり、今後長きにわたってロシアを憎む土壌を生み続けてゆくこととなります。その動きはバルト三国やポーランドのようにロシアの圧政に苦しんだ国々を刺激するとともに、ハンガリーのオルバン首相のように親露派の東欧指導者への非難として強いものとなっています。

停戦後の講和条約交渉は難航するでしょう。そしてロシアとウクライナの双方を満足させるような状況を作り出すのは不可能なわけですから、破綻することが避けられないような取りあえずのものを作るのが精いっぱいとなるのではないかと思います。

戦争が始まって間もなく3年になるウクライナがロシアの攻撃に疲弊し講和の可能性を排除しない人たちが増えているのは事実です。ロシアが損害を苦にしないような攻撃を維持しているために、人的資源が枯渇する兆しも見えています。北朝鮮の軍が参戦することは、こうした人的な不足に拍車をかける恐れのあるものですから軽視することはできません。こうした状況からゼレンスキーが停戦を選ばざるを得なくなることは想像できるのですが、ウクライナのロシアに対する恨みは消えないでしょう。それがテロのような陰湿な形で動き始める恐れは無視できません。

暗い時代が始まるのではないかと思います。

西 正典
Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループシニアアドバイザー、トランス・パシフィック・グループ会長（https://www.transpacificgp.com/）。